
浮気のススめ

高橋熱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

浮気のススメ

【Nコード】

N1945U

【作者名】

高橋熱

【あらすじ】

単調で退屈な結婚生活。息詰まりの日々。

「メル友募集サイト」で知り合った「シオリ」という同じ思いの既婚女性と、「僕」は人生で初めての浮気を経験する。

ホテルでうっかり寝過ごしそうになった僕。

後ろ髪をひかれながらも、シオリを部屋に残し、逃げるようにホテルを飛び出した僕をその後に襲った悲劇とは…。

部屋に入ると、オートロックの施錠音が靴を脱ぐ我々の背後でがちやりと鳴った。汗や香水や煙草や弁当やアルコールが混ざり合った複雑な芳香。顔の黒子がどうにか数えられる程度に落とされた照明。忘れていた古傷を思い出させるように流れる一昔前のポップス。

簡素で窮屈なその部屋は、つい今しがたまで別の愛の形が営まれていた痕跡で満ちていた。

創意工夫の欠片も見られないありきたりなホテルのロゴマーク。そしてそのロゴが大きくプリントされたダブルベッドの掛け布団。ひび割れた真っ赤な合成皮革のラブソファ。手垢だらけのガラスのテーブル。カバーの壊れたテレビのリモコンに自販機型のミニ冷蔵庫。

どれをとっても僕にはただ前近代的で不衛生に見えたが、年の瀬も近いフライデーナイトのホテル探しではあまり贅沢も言えなかった。

「ラブホテルなんて、結婚前に行ったきり」

新築祝いに訪れた友人の家を見るように、シオリはトイレや浴室やアメニティグッズなどを恐る恐る点検して回っていた。

「金曜日と言っても、ここまで混んでは思わなかったね」

ソファに腰をうずめて、コンビニで調達した発泡酒のプルタブを引きながら、僕は七軒目にしてようやくたどり着くことのできた労を自らねぎらうように言った。

「浮気とか不倫してる人、多いのかな」

「真っ当な関係の方がまだ多いと思うけど」

「ごめんね、こんなお婆さんで。本当はもっと若い女の子が良かったんじゃない？」

「そんなことないよ。シオリとこうなること、ずっと望んでいたんだから」

「また上手いこといって。コウキさん、他の人にも同じこと言ってるんじゃない？」

「待ってよ。結婚以来、妻以外の女性と二人だけでデートすること自体初めてなんだから」

「私だって初めてだもん。旦那以外の男の人とこういうところにくるの」

我々は互いに顔を見合わせた。先に目線を切ったのは僕の方だった。異性をこんなに近くで意識するのはいつ以来なのか直ぐには思いつけなかった。

こうして面と向かって「コウキさん」なんて呼ばれると、それは自分のことではない気がした。今日初めて顔を合わせた女性と今こうしてラブホテルの一室で二人きりでいることが、いくら酒に酔っているとはいえ、自ら選択した行動なのだという実感がいま湧いてこなかった。

「コウキ」や「シオリ」という名前は、我々がメル友サイトで使用しているハンドルネームだった。ちょうど一月程前、僕のメッセージにシオリが反応したことをきっかけにやりとりが始まり親交を深め合った。お互い既婚者であり、それぞれ複数の子供の未来を背負っていた。

職務が目まぐるしく変わるストレスに加え、家庭でも子供の成長に伴い「父親」としての役割分担は増えていた。時間の流れは加速度的に早まり、二人の娘の行事が混交し、昨日食べた夕食のメニューを思い出すこともできなくなるほどだった。このまま年をとり、頭が呆け、酒で体が壊れていくことへの「恐怖」のようなものを、僕はこれまでの三十年余りの人生の中で初めて実感していた。

そうした気持ちを身近な誰かに話すことはできなかった。身近な人間は皆いつでもストレスを与える側になりえる者ばかりだった。全く見ず知らずの「第三者」の存在が必要だった。愚痴や悩みにそっと耳を傾けてくれる誰か。それが、若い頃の「恋心」を思い出させてくれる同世代の異性であれば尚良かった。

そんな時、無料の「メル友募集サイト」をネットで見つけた。「後ろめたさ」よりも「好奇心」や「切実感」の方が圧倒的に勝っていた。

シオリは、僕のメッセージに対して一番最初に返事をくれた女性だった。その内容は、それ以降に送られてくるどんなメールも比較にならないくらい、丁寧で誠実だった。

シオリにメールを送ると直ぐに返信があった。彼女はどのような生活の局面にあっても、僕とのメール交換を優先してくれた。だから僕も次のシオリの反応を見たいがために、うまく妻や上司の目を盗み素早く返事するよう心がけた。

自分でもおかしいと思うくらい、僕はシオリに夢中になった。妻にさえ久しく言ったことのない「好きだ」とか「愛してる」という言葉も、バーチャルなシオリには気兼ねなく使うことができた。文脈に相応しい顔文字や絵文字を適宜織り交ぜる術も熟達した。単なるメル友の枠を超えて、現実のシオリに「会ってみたい」という気持ちちは、日増しに強くなっていった。

「本当に会っちゃったね」とシオリは頬を上気させて言った。

「本当に会ってるんだよ」と僕は答えた。「後悔してない？」

「コウキさんこそ、愛する奥様とお姫様二人もいるのに大丈夫？」

「家族の話は止めようよ。現実逃避の時間なんだから」

「だって、後悔してない、なんて聞くんだもん。後悔するくらいなら、最初から会わないわ」

「そうか、ごめん」

目を閉じると頭がくらくらしたので、僕は急いで目を開けた。念願のシオリが目の前にいるのに今一つテンションの上がらない理由について僕は考えていた。酒を飲み過ぎたのかもしれないし、ホテル探して歩き疲れたのかもしれない。写メで見ていた彼女よりいささか老けていたからかもしれないし、「長女が学校で酷い怪我をした」という妻からのメールのせいかもしれないかった。

一瞬、自分の名前を呼ばれたような気がして天を仰いだ。どうしたの、とシオリは言った。何でもない、と僕は肩を竦めた。

「奥さんのこと考えてるんでしょ？」

「まさか」

見透かされたようでどきりとした。奥さん、という言葉が重く腑に沈んだ。

「ごめん、現実逃避、なんだよね」

シオリは自称三十二歳。とびきり美人ということではないが、妻よりは年相応の色気と匂いを感じた。

部屋の自販機から缶ビールを一本買って、僕は一口、口に含んだ。今度はもっと強く酔いが回って欲しい、とあえて目を閉じてみた。少しずつ脈が上がっているのが分かった。あと少ししたら、バーチャルな恋愛ではなくリアルな大人の男女の関係になるのだ。

手持無沙汰に携帯を手にしてみたが、開くことなくまた同じ場所に置いた。待ち受け画面は浴衣姿の娘の写真だった。事前に他の画像に換えておくべきだった、と思った。特に長女は百人に聞いたら百人が「母親似だ」と答えるほど妻そのものだった。

往生際悪く、中々踏ん切りのつかない自分を、我ながら情けなく思った。根性無しなのか、いわゆる「罪悪感」のようなものが芽生えているのだろうか。

「どうしたの？」

膝頭を抱えている僕の手の甲あたりに目線を下げながら、シオリは首を傾いだ。

「ううん、どうもしないよ。これからどこにキスをしようかなって考えてた」

「え、何言ってるの」

シオリは恥ずかしそうに俯いた。その瞬間、わだかまりの楔がわずかに引き抜かれていくのを感じた。

頭と脛が疼いた。もう酒は止めにすべきだった。入室時の他人の匂いは、今ではほとんど気にならなくなっていた。シオリから漂う「女」の匂いが、他のいかなる匂いをも中和し、優先した。

小さいけれど引き締まった唇の上で、謙虚に自己主張する艶やかな口紅。生温かいエアコンの風がシオリの髪を経由して僕の頬を掠めた。

シオリは小さく息を吞んだ。それを見て、僕も気付かれぬよう真似をした。シオリはちらと僕を見た。気持ちを落ち着かせようとする余計な力が、胸の辺りの筋肉を引き締めた。

キスすべきだ、と僕は思った。思うが早いか、僕は彼女の肩を寄せ、顔を見つめ、キスを求めた。一旦体が動き始めると、もう何も考えることはなかった。シオリの逡巡と緊張が混じり合ったわずかな抵抗が僕の指先に伝わった。

シオリは何も言わず静かに目を閉じ、僕に体を預けた。我々は淀みなく唇を重ね合った。メールでは、キスは挨拶と同じくらい当たり前なことだったが、それはあくまでもバーチャルな世界の話。今は生々しい「現実の行為」として唇が一つになっている。

匂い。温もり。柔らかさ。

それらはこれまで決してバーチャルでは味わうことのできなかった感触であり、長年妻を相手にしてきたものとも大きく異なってい

た。

最近の妻とのキスは、まるで同性にキスしているのにも似た違和感を感じていた。もちろん、結婚前はそうではなかった。妻を愛し、キスすることは人生そのものだった。未来永劫、彼女と一緒にいたいと思ったから結婚を決意したはずだった。

結婚式を終え、翌年子供が生まれ家族が増えてからというもの、瞬く間に月日は流れた。しかし、この間に何かが変わったのだ。

自分が変わったから、妻も変わったのか。妻がそうだから、自分もそうなのか。鶏が先か、卵が先か。恐らくはどちらも正解であり、誤りだった。

シオリの口からは、生活に対するどのような不平も不満も愚痴も絶望の言葉も生まれてこなかった。純粹に、男と女が「愛情表現」として行うキスそのものだった。

唇が痺れるほど口付けした後、僕はシオリの体を抱いてベッドへ導いた。シオリは僕の誘いを今度は無抵抗に受け入れた。楔は追加したアルコールの力によって完全に取り除かれていた。思い描いていたシナリオにそれほどの誤差も障壁もなく、我々が全裸になるまでには大した時間はかからなかった。

＊

僕の下半身には、まだ性交後の粗熱と湿り気が残されていた。

「何考えてる？」

天井に目を向けたまま、僕はシオリにそっと聞いた。それは自分に対する問いでもある気がした。

「初めての相手がコウキさんで良かったなってこと」

シオリは僕の胸に手を載せて、乳首を弄んだ。

「初めてって、処女みたいなこと言うんだね」

「だって私、処女だもん」

最後の子供ができてから三年以上もセックスレスだという事実を僕は彼女から聞いていた。もし自分が三年間射精していない、と仮定したらどういふことになるのだろうか、と思った。

「ねえ、くすぐったいよ」

「男の人でもここ感じるって言うじゃない？」

臆することなく体に触れるシオリが子供っぽく、余りにも無防備に見えた。もし今名前も知らない男の乳首を摘まんで遊んでいるなんてことを旦那が知ったら、彼はどういう反応をするのだろうか。

家庭を壊すつもりなど微塵もない。「異性」としての役割を妻に求められないというただ一点を除けば、彼女は家事も育児もきちんとかなす（きちんとし過ぎていて、ということは別問題として）いい妻であり、いい母親だった。子供も曲がることなく素直に成長している。家族を失うことは、自分を失うことと同じくらい辛いことだ。

しかし、その一方で「ささやかな幸福」に退屈している自分がいるのも事実だった。だからサイトにも登録したのであり、同じような気持ちでいるシオリとの出会いがあった。単調な日々の中、日常では味わうことのない異性へのときめきや恋心のようなものに、少し憧れていただけなのかもしれない。

「携帯やインターネットがなかったら、私たちは一生出会うことなかったんだろうね。住んでる場所も違うし、仕事でも生活でも何の接点もないもんね」

「ITの普及によってあらゆるタイプの『出会い』のチャンスが増えたことは間違いないね」

暗がりの中で、シオリの目の位置だけは何となく分かった。顔の大きさに比して、シオリの目はとても小さく見えた。

「結婚した当時、こんな風に浮気するなんて、考えた？」

「いや」と、僕は正直に首を振った。結婚式の時も子供が生まれた時も、妻を一生愛し続けよう、と固く心に誓ったはずだった。

「私、こう見えても本当に固いの。コウキさんと出会ったことによって変えられてしまった」

「人のせいみたいに言ってる」

「誰でも簡単に好きになったり、会いたくなったりなんてしない。本当にコウキさんが真面目で、素敵だなんて思ったから今日だって来たのよ？」

「絶対にばれない自信ある？」

「大丈夫。信頼されてるもん」

「仲いいんだね」

「エッチしないことを除けば、基本的にはね」

妻は僕を信頼しているのだろうか。決して浮気などするような男ではないと思っているのだろうか。

僕は妻を信頼している。事実、彼女が夜に外出したり飲みに出歩くことはない。もちろん、昼間の行動については知る術はないが、まだ小さな子供が二人もいるのだ。浮気などしてる暇はないはず。

シオリの旦那もきっとそう思っているのだろう。しかし現実はそれぞれお互いの家族を欺き、裏切っている。家族を愛しているはずなのに。失いたくないはずなのに。家族を愛している自分。裏切っている自分。そのどちらも、自分自身の姿だった。

きっとシオリも、家では弁当を作り、掃除をし、風呂を沸かし、アイロンをかけ、学校の父母会に参加するごく一般的な主婦なのだ。旦那の仕事は夜遅いが収入は安定しているということだった。それでもこうして異性との出会いを求めたということは、何か彼女にも

切実なものがあるのだろう。

「時間は何時まで平気？」

「十一時ちょっと前にはここを出ないと終電に間に合わないかな」

「私はもう少し遅くても平気なんだけどな。主人にはそう言ってるから」

「理解のある旦那さんなんだね」

「理解あるというより、無関心なだけ」

無関心。それはしよっちゅう僕も妻から言われている言葉だった。髪を切っても、新しい服を買っても、部屋の模様替えをしても、指に包帯を巻いていてさえあなたは気がつかない、と。

再び妻の顔がありありと僕の頭に浮かんだ。その顔はしかし決して不機嫌でも憂鬱な顔でもなく、むしろたまにしか見せない穏やかで優しい笑顔だった。

それから、子供が怪我をした様子。膝を擦り剥き、目が腫れてしまっている映像。さすがにこれには僕も辟易した。

シオリと一緒にいたい、という気持ちと、一刻も早く帰らなくてはいけない、という気持ちがないまぜになり目まぐるしく立場が入れ替わった。

いくら酒に酔っていても、終電に乗り遅れたり、朝帰りをしたことはこれまで一度もなかった。それは僕としてのポリシーであり、妻との暗黙の了解でもあった。

それに明日は娘の学校公開の日で、一時間目の国語から一緒に見学に行くことになっていた。休日とはいえ、朝からのんびり寝ているわけにはいかない。

僕は携帯の時計を見た。入室してから既に一時間半が経過していた。僕にとっての初めての浮気は、目を瞑り、再びそっと開くくらい一瞬の出来事だった。

結婚式で交わした僕から妻への「誓約」は破られた。それは偶発的なことではなく、明らかに自らが選択した道だった。「魔がさした」というにはあまりにも用意周到で計画的だった。家族を失いたくないと言いながら、これほど容易く家族を裏切ることができるとは自分でも驚いた。

僕は無性にシオリの体温が恋しくなり、くすぐったい、と抵抗するシオリの太腿の間に手を入れた。

「コウキさん、ねえ」

シオリは体をひねり、抵抗した。しかし僕の手で、その縊りはたちどころに戻された。シオリも負けじと僕の口に舌を入れた。それから、ふっと体を離し、動きを止め、僕の視線の先に自身の目を合わせた。

「ん、どうしたの？」

「今度はちゃんとゴムをしてね」とシオリは言った。「お互いが不幸にならないためにも」

不幸。僕は枕元のティッシュ箱に備え付けてあるコンドームの袋を確認してから、油断をするとたちどころに萎えてしまいそうな気持ちに叱咤するかのよう、シオリの乳房に置かれた手指を半ば自棄っぱちに動かした。

＊

シオリがその音に気付いたのは、お互い裸のまま眠りに落ちていた時だった。シオリに起こされなければ、もしかしたら朝まで寝入ってしまったかもしれないくらい、僕の体は二度の交わりで疲弊していた。

「ねえ、コウキさん、この音」

「ん」と呻くように、僕は枕元の携帯を手にして時計を見た。

「やばい、すっかり眠っちゃったんだ。支度しなくちゃ」

僕はシオリの腕枕をやや強引に解きながら伸びをした。一体、この汚泥のような体のだるさは何なのだろう。

バーチャルであれば求めたシオリの体をようやく手に入れたはずなのに、満足感というよりも、自分に割り当てられた課題がまた一つ増えたような感覚だった。お決まりの射精後の無力感なのかもしれない。

「聞こえる？」とシオリは言った。マスカラの取れかけた目は真っ赤に充血し、瞼に皺がいくつも刻まれていた。ホテルに来てから、十歳は老けこんだように見えた。

「非常ベル」

我々は一度話を切って改めて耳を澄ませた。確かに電話の呼び鈴のような音が、どこかで切れ目なく鳴り続けている。

「何だろう」

両腕を上上げて伸びた姿勢のままの僕に、シオリは不安そうに言った。

「この建物から鳴ってる？ 違う建物？」

その確認は希望的観測に過ぎなかった。すぐに止むよ、と言って僕はシオリの細い指を束ねて握った。

「フロントに確認しておいた方がいいんじゃない？」

「誤報だと思うけどね」

僕の言葉も何の根拠もなく説得力はなかった。我々は沈黙してその音が消えるのを待ったがベルはなかなか鳴り止まなかった。その沈黙は、今日初めて顔を合わせてから今しがた転寝をしかけた時間に匹敵するくらい、僕には長く感じられた。

「ややこしいホテルだね」

上半身を起こして、足元に丸まっているユニクロのボクサーブリ

ーフを慌てて履いた。「そろそろ着替えなくちゃ。終電に乗り遅れたらまずい」

僕は受話器を取り、本体に貼られたテプラの指示通り、「フロント9番」を押した。「駄目だ、話し中」

何度かけ直しても同じだった。ワイシャツに腕を通しつつ、玄関ドアの覗き穴から外の様子を窺おうとしたその時、ようやくベルの音は止んだ。覗き穴からは観葉植物と向かいの部屋番号しか見えなかった。

「こういう時ラブホって怖いよね。本当に火事なんてなったら、どうやって避難すればいいんだろう。皆、裸だろうし」

怖いこと言わないで、とシーツを体に巻くように抱きしめているシオリを横目に、僕はベッドサイドに腰掛けてもう一度フロントを呼んだ。

「フロントがこんな状態じゃ話にならない」

部屋をさっと見渡した限り、外と繋がる窓もなさそうだった。

「あと何分？」とシオリは言った。

「五分くらいで出たい」

「私、五分じゃ支度できない。メイクもあるし。本当に帰っちゃうの？」

「ごめん、万が一乗り遅れたら、大変なことになるんだ」

抱えたシーツをようやく手放し、髪の毛を根元からしっかりかきあげて、シオリはけだるそうに床に落ちているブラに腕を通した。

白く柔らかな胸には、先程の愛撫によって薄く赤みのさしている部分がところどころあったが、それをみても、最初にシオリの身体に触れた時の新鮮さは僕の中からほぼ完璧に失われていた。

会話が途切れると、部屋はとても静かになった。隣の部屋からシヤワーを浴びている音がはっきりと聞こえた。僕は残り時間だけを気にしながら、淡々と支度を進めた。腕時計をはめ、携帯を上着のポケットにしまい込んだ。

シオリは小さく溜息をつき、天井を仰いで目を閉じた。溜息の意味が僕には何となく理解できたが、どうしてやることもできなかった。終電で帰ることは伝えてあったはずだった。まさか自分だけ先にホテルを出ることになるとは想定外だったが。

ダイヤがいくつも埋め込まれたシオリの結婚指輪が、だらんと垂れた左手薬指の上でルームライトに反射していた。僕は線の細い自身の指輪をととても恥ずかしく思った。ヴィトンのバッグ。グッチの化粧ポーチ。ブルガリの時計。その統一性のなさが、かえってシオリの経済的余裕を感じさせた。

今日のデート代を捻出するのに、今月は十日間近く昼食を抜いていた。食後の缶コーヒーも控えた。散髪も一ヶ月先延ばしにした。妄想を具現化するためには、その程度のことは苦勞とは思わなかった。

今、そのシオリが目の前にいる。あれほど妄想し、切望し、単調で退屈な日常に一時の潤いと希望を与えてくれたシオリ。キスをして、抱きしめて、お互い裸になって一つになった後、まさかこんな気持ちになるなんて、自分でも思いもよらなかった。

「浮気するということは、そこまでの覚悟がなくてはいけないということね」

しばらくぶりに、シオリは口を開いた。

「そこまで？」

「もしかしたら、その人という間に、死を迎える可能性もある、ということ」

シオリの二回目の溜め息が改めて僕にも聞こえた。その言葉はあまりにも重く僕の心に響いた。

止んだと思っていた有線が安いオモチャのように鳴っていた。ボリュームが気付かぬ間に絞られていただけだったのだ。隣室のシャワーの音も相変わらず聞こえてきた。二人でシャワーを浴びていた

ら、きつとあの非常ベルも聞こえてこないかもしれないな、と僕は思った。

「やっぱり、会ったのは失敗だったのかな。メル友はメル友のまま
でいた方が良かったのかもね」

シオリは親指の爪の先を片方の指で摘みながら、言った。

「そんなことないよ。今日のことは一生忘れないし、これまで通り
シオリとメールもしていきたいし。また時間が合えば、会いたい」

「本気でそう思ってる？」

「思ってるよ」

「顔にそう書いてない」

「書いたまま電車乗れないよ」

「ねえ、今まで通り、朝も昼も夜も、メールくれる？」

「もちろんだよ。会ったからって何も今までと変わりはしないよ」

あまり自信はなかったが、そう言うっておかなければ早く帰らせて
もらえない気がして、僕は投げやりであることを自覚しながら言っ
た。

「信じていいのかな」

「またメールするよ。お金はここに置いておくね。本当にごめん」

残された時間はもうなかった。僕は一万円札を二つに折ってテ
ブルに置いた。シオリはまだ下着のままだった。髪の毛先が何箇所
か跳ねていた。先程までベッドで愛し合っていた女性とは思えな
かった。唇の感触も、肌の温もりも、彼女の中に入っていた時も射
精した後の感覚も、今では遠い過去の記憶のようだった。

最後に僕はもう一度「ごめんね」とだけシオリの頭の上から言い
置いて、靴べらで革靴を押しこみ部屋を飛び出した。

フロントを横切る時、二、三組のカップルが何か立ち話をしていたが、顔を見られるのが嫌だったので、深く俯いたまま小走りにホテルを後にした。

愛し合った後の別れ方としては、相当印象の悪い別れ方だった。最後にちらと見上げたシオリの顔の白さばかりがやけに強調されて脳裏にこびりついていた。しかし、それ以上ホテルに留まっていたら、終電に間に合わないのは確実だ。タクシーで帰ろうものなら、少なくとも二万円以上にはなるだろう。かといってネカフェで始発まで待つというわけにもいかない。

いずれにしても妻からなじられるのは間違いないし、これ以上凹まされるのは勘弁してもらいたかった。この時間に帰ることさえ、翌日の反応が怖いというのに。

最終電車は酷く混み合っていた。まるで通勤ラッシュ並みだった。何とか一本のつり革にしがみつきながら、僕は携帯を取り出し、少し考えた末、まずは「家族フォルダ」を開いた。

まさか起きてはいないだろう、と思って送った「帰るメール」には、妻から直ぐに返信があった。「接待、お疲れ様」という言葉と合わせて、子供の怪我の情報について補足されていた。鉄棒に頭をぶつけて少し瘤ができた、という程度のことだった。

わざと心配させるようなメールを送るな、と言いたかったが、妻にとつてこちらが浮気をしている真っ最中なんて知る由もないことであり、止むを得ないことだと諦めた。

次にシオリあてのメールを考えた。お詫びの気持ち伝えなかったが、うまい言葉が思い浮かばなかった。それどころか、シオリにメールをする、という行為自体がとてもハードな仕事に思えた。シオリと会うまで、こんなことは思いもしないことだった。あれほどシオリに夢中になっていたことが嘘のようだった。

「会わない方が良かった」という帰り際のシオリの言葉が、偏頭痛のように疼いた。それでもどうにか差し障りのないお詫びだらけの

文章を考え、短いくせに何度も読み返してから、意を決して送信ボタンを押した。

それが終わると、僕は吊り革に掴まったまま、手の甲に額をつけてうつらうつら意識と無意識の境界をさ迷った。寝過ごすわけにはいけないので、眠気覚ましに度々携帯を開くものの、シオリからの返信はなかった。

車窓に細かい傷のような筋がいくつも流れていた。雨が降り始めたようだった。もう二駅の辛抱だったが、再び抗いがたい睡魔が僕を包みこんだ。目を開いたり瞑ったりを何度も繰り返した。

斜め前のシートで左右に揺れながら熟睡している若い女の足が目に入った。シオリの足よりもはるかに細く長かった。半開きの口元と合わせて、両足も少し開いていた。向かいの座席に座っている学生からは下着が丸見えなのではないかと思う程だった。

僕はじっとベージュのストッキングに包まれたその女の足ばかりを見ていた。そしてどんな下着を身につけているのかということについて、眠気覚ましに真剣に想像した。

＊

翌日、僕は朝食を準備する娘の皿の音で目が覚めた。

瞼が筋肉痛になるとすればきつとこんな感じだろう、というやるせない痛みが瞬きをする度に目の裏に広がった。次女が僕の目覚めに気付き、布団の上にどすんと馬乗りになりながら「パパ、起きたあ」と掛け布団を叩いた。

僕は観念し、動く度に鳴る節々の関節の音に年齢の衰えを感じながら、一月前に死んだ家畜のような体をどうにか起こした。

妻は黙々とご飯をよそっていた。洗濯機はいつものようにがたごとと音を立てていた。「おはよう」という僕の呼びかけに、「おは

よう」と彼女はいつも通り答えた。その後で少しだけ、僕の顔をじっと見た。

真顔の妻に僕は一瞬にして居竦められた。まともに視線を合わせるのが怖かったが、逸らすのは不自然な気がしたので、顔の緊張を解しながら極力平静を装った。

「昨日はあまり飲まなかったの？」と妻は言った。

「うん、途中からかなりセーブしたから」

「ふうん、珍しい」

「学校行くのに、酒の匂いさせていたら他の人に失礼だからね」

「ちゃんと覚えてたんだ」

「当たり前だよ」

器をお盆に載せて運ぶ妻の後を追って、僕は言った。妻の態度も話しぶりも全くいつも通りなので、僕は内心ほっとした。

スーツもワイシャツもネクタイも細かいところまでチェックしたので、抜かりはないはずだった。シオリの化粧や香水がそれほど強くなかったのは幸いだった。

ひとまず第一関門は突破した気がした。しかし時計替わりに流していたテレビから「池袋のラブホテル」という言葉が聞こえた時、僕ははっとして箸の動きを止めた。

それは、昨夜十一時半頃、池袋のラブホテルで火災があり、身元不明の男女合わせて五名が死亡し、数名が負傷したというニュースだった。視聴者からの投稿映像ではあったが、激しく燃え広がる火の手が窓ガラスを突き破り、ホテルの屋外看板にまで達している様子が映し出されていた。鎮火に当たる消防車の回りを多くの人だかりが取り囲んでいた。

看板には、昨日ベッドの掛け布団で見た色気のない書体の文字と同じ文字が暗闇の中でもありありと読めた。画面は既に次のニュースに切り替わっていたが、僕は魂のない木像のようにいつまでもその場で固まっていた。

「どうしたの？」と妻は聞いた。

「あ、ううん、別に」

「昨日の懇親会、池袋だったんじゃない？」

「うん。でも気が付かなかったな。駅を挟んで反対側の店だったから」

「こんな年末にラブホテルの火事で亡くなるなんて、何ともお気の毒様ね」

「本当だね」と言おうとしたが、僕の口から上手く声が出てこなかった。その間に「ほら、早速左手が落ちてる」と妻は子供を叱った。食事の姿勢については他の躰以上に厳しかった。僕は言葉を飲みこんで、中途半端に箸の先に付着していた目玉焼きの黄身を舐めた。

それ以来、妻からは「ラブホ火災」に関する話題は出てこなかった。しかし僕の中では、昨日池袋駅北口でシオリと待ち合わせをし、傍の居酒屋でお酒を飲み、散々歩き回ってからようやくあのホテルに入り、再び缶ビールを飲み、シオリと二度体を重ね、火災報知機の音で目覚め、シオリを置いて部屋を出ていくまでの一部始終が、早送りの無声映画のように繰り返し流れていた。

ホテルのロゴ。見覚えのあるエントランスの看板と植栽。身元不明の五名の男女。

食事が終わった後で、僕は携帯電話をポケットに突っ込み、トイレの鍵を閉めた。シークレットモードを解除する指が震えているのが解った。何度も暗証番号を押し間違えた。焦るな、と自分に言い聞かせた。

しかし、シオリからのメールはなかった。シオリ専用のメールフォルダ「?8」は、昨日の午後五時三八分、「駅に到着。これから向かいます（＊＾|＾＊）」という満面の顔文字で終わっていた。

僕は便器に腰かけ、ズボンを下ろし小便をした。小便をする時、性器にちくりとした痛みを感じた。全体が腫れたように赤く、皮膚の一部があかぎれのように裂けていた。

酔いに任せて力み過ぎだ、と僕は思った。シオリの匂いや感触を思い起こそうとしたが無駄だった。性器にはただ、やり場のない不快な痛みがあるだけだった。

あの非常ベルは、本当の火災を知らせていたのだ。思えば、ホテルを出る時に何人かがフロントに詰め寄っていた気もするが、特に火の気配は感じられなかった。煙臭くもなかった。シオリの帰り支度も着実に進んでいた。仮に火災があったとしても、シオリは首尾よく逃げ遂せているはずだ。亡くなった人にシオリが含まれている可能性は限りなく低い、そう思ったかった。

そして、もしあのままシオリと寝過ごしていたら、ということを考えて。あまりの息苦しさに目覚めると、既に部屋の中は煙で覆われ、視界はほとんどなくなっている。玄関も開かず、脱出する窓もない部屋で二人裸のまま成す術なく、次第にそのまま意識は遠のいていく。現場に丸焦げになった遺体。奇跡的に焼け残った携帯電話から身元が判明。それぞれの家族に、警察から遺体確認の連絡。

「池袋のラブホテル火災で、お宅のご主人（または奥さん）が亡くなった可能性があるのですが」

その時の家族は一体どんな気持ちで現場に向かい、顔を合わせるのだろう。それを考えると、僕はいたたまれなくなった。

なぜシオリからメールがない？ 死亡した五名に、万が一シオリが入っているとしたら。

僕は混乱した。少なくとも、自分が直前まで彼女と一緒に居た、という事実は誰にも知られてはいけないのだ。

発作的に、アドレス帳にあるシオリの電話番号とメールアドレスを「受信拒否リスト」に追加した。それから、シオリの登録情報を抹消した。シオリからもらった写真も送信履歴も全て消去した。

ついでにメイン画面の壁紙も娘ではなく、元々携帯に登録されていたデフォルトの「幾何学模様」に変更した。今更そんなことをしても何の意味もないことは分かっていた。しかし、肌身離さず持っている携帯の中に、シオリの痕跡を残すことが怖かった。

「忘れろ」と僕は自分に言い聞かせた。昨夜の情事は妄想だったのだ。シオリなんて女はいなかったし、コウキなんて人間もいなかった。存在しない者同士の出会い自体ありえない話だったのだ。

「ねえ、早く出てよ」と扉の取っ手をがちゃがちゃと引っ張る娘の声で僕は我に返った。思考停止、思考停止。僕は何度も心の中でそう唱えながら、いつもよりやや多めに消臭剤を振りまいた。

しかし、思惑に反して数日が経過してもシオリのことを忘れることはできなかった。忘れるどころか、より大きな存在となって僕を浸食した。考えまいとする意識が、より考えざるを得ない思考を作り出した。

職場で少し手が空くと、検索エンジンのキーワードにホテルの名前を打ち込んだ。火災に関する記事はさまざまなメディアで報道されていたが、どれも五名の身元に繋がる情報はなかった。仮に判明していたとしても、火災の場所が場所だけに、プライバシーの観点からおそらく公表はされないだろう、と僕は思った。

早まらず、最後にもう一度シオリと連絡をとってみるべきだった、と僕は後悔した。電話番号もメールアドレスも消してしまった今と

なっちはもう術がなかった。

彼女の自宅があるのは埼玉県志木市。そこで彼女は両親と同居しているはずだった。会う場所を「池袋」に決めたのも、僕の職場が山手線沿線なのと、シオリが東武東上線一本だったからだ。

葬儀屋。

亡くなっているとすれば、当然の話だ。事情が事情だけに行わない可能性も考えられるが、あたってみるだけの価値はありそうだった。

僕はネットで「志木市内」の葬儀屋を調べ、リストの上から順番に電話をかけた。本名が分からないので、性別とおおよその年齢を伝え、近日中にそうした葬儀が予定されているかどうかを聞くことにした。名前を言わないことを不審に思った一部の業者からは回答を断られるケースもあったが、大半は予定なし、ということだった。あの日からすでに一週間近くが経過していた。ひょっとしたら、もう葬儀は終わっているかも知れなかった。ひっそり、身内だけで行ってしまったのかもしれない。いや、そもそも亡くなってなどいないので葬式自体存在しないのかもしれない。

そう思いながらかけた最後の葬儀屋で、思いがけない返事が返ってきた。

「水越さんのご葬儀のことでしょうか？」と年配の業者は言った。

「三十代の女性というと」

「そうです。あまりに突然のことだったので」と僕はそのまま繋げた。

「あんな火事でなくなるなんて……それは、ご愁傷様ですね」

「葬儀の日時を教えてくださいいただけますか？」

「明日の六時からお通夜、明後日十時より告別式になります。場所は志木東セレモニーホールです」

埼玉県志木市在住。三十代女性。火災で死亡。

ここまで符合していればほぼ間違いないのではないか。「あんな火事」と葬儀屋は言ったのだ。

電話で教わった斎場を直ぐにネットの地図で確認した。マウスを包む僕の指先は震えていた。翌日の夜の予定を手帳で調べ、特に何も入っていないことを確かめた。

翌日、妻には「少し遅くなるから」と言っただけで家を出た。限りなく黒に近いスーツを着て、黒いネクタイを鞆に忍ばせた。

浮気相手の生死を確かめるために葬儀場まで行くなど常識的に見ても馬鹿げていると思ったが、もし本当にシオリが亡くなったのだとすれば、このまま一生妄想の記憶として葬り去るにはあまりにも不憫過ぎる気がした。少なくとも、亡くなる間際まで一緒にいたのは、旦那でもなく子供でもなく、つい一月ほど前にバーチャルで知り合ったばかりの、一夜限りの男なのだから。

妻は今夜僕がどこに行こうとしているのかも知らず、とびきりの笑顔で見送った。シオリと会う当日もそうだったが、そういう日に限って気味悪いほどの笑みを浮かべるのだ。まるで何もかも見通されているかのような感覚だった。

夕刻、一時間の早退届を出して、どうにか五時過ぎの山手線に飛び乗ることができた。僕の頭はシオリの遺影が掲げられた大きな祭壇で一杯だった。

水越。ミズコシ。シオリの本名はそんな名前だったのだろうか。メールアドレスの一部に「aqua」という言葉が使用されていたことを、僕はふと思い出した。

駅から歩いて十分のところに、そのホールはあるはずだった。歩きながらネクタイを締めている間、何組かの礼服を着た若い男女に

追い抜かれた。

式場の入り口には「水越家」の看板が立てられていた。記帳所の前に大きな人だかりができていたが、参列者はまだそれほど多くはないようだった。建物の奥の祭壇には写真が掲げられ、白を中心とした生花が写真を取り囲むようにして隙間なく敷き詰められているのが僕の位置からでも確認できた。

受付を無視して、僕は「第二斎場」と掲示された建物の中へ歩を進めた。最前列には、何人かの喪服を着た女性が座っていた。喪章を上着に付けた背の高い男性の足元に、幼稚園児くらいの二人の子供がふざけながらまとわりついていた。焼香はまだこれからはずなのに、既に場内はその臭いで一杯だった。

遺影の中の女性は、そこから見渡せる人々をくまなく包みこむような温かい微笑みを湛えていた。場違いに激しく心臓が鼓動していることを誰にも悟られないようにしながら、僕はじっと遺影に目の焦点が合うのを待った。

ボブ風の髪型に小麦色の肌。目尻はやや下がり、輪郭もふっくらした卵型。右の小鼻の横に大きな黒子。それに引きずられるように口元が開かれ白い歯がこぼれている。

写真は全くの別人だった。シオリは小麦色の肌でもなく小鼻の横に大きな黒子もなく、目尻はむしろ上がっていた。まだあの日から一週間も経っていないのだ。間違いない。

僕は目を閉じ、その場で一つ大きく深呼吸をした。安堵のせいなのか外気の寒さなのか分からなかったが、膝が震えているのがわかった。背後にいる人の会話が部分的に聞こえてきた。実家の二階、石油ストーブ、介護、という言葉が強く強調されて僕の耳に届いた。正門に向かいながら、僕は携帯の時計を見た。今すぐ戻れば、久しぶりに皆で食卓を囲めそうだった。妻には予定していた会合が急遽中止になった、と言えればいい。

何のメールもあるはずないと分かっているながら、シークレットモードを解除した。当然のことながら、メールはなかった。シオリと付き合っている間、一体何度この動作を繰り返したことだろう。

ネクタイをとり、ワイシャツの第一ボタンをはずした。電灯の少ない路地に落ちる月明かりは、すれ違う参列者の吐く白い息ばかりに反射した。これから通夜が始まると言うのに、一人だけ駅に向かって歩いている自分が、何となく後ろめたく感じた。

「コウキさん」

背中越しに女性の声が聞こえたが、それが自分に向けられていると気が付くまでにしばらく時間がかかった。

「ん？」

後ろ髪を上げていたのと夜の暗がりの中で一瞬誰か分からなかったが、背格好、佇まい、そして何よりもその小粒な目と線の細い優しげな声は、間違いなくシオリだった。

「優しいコウキさんのことだから、きつとここに來るって思ってた」

シオリの手には、きつくハンカチが握りしめられていた。あの日していた煌びやかな結婚指輪は当然のことながら外されていた。明かりが弱くても、一週間前のシオリの顔とは明らかに異なっているのが分かった。頬がこけ、目の下も落ち窪み、憔悴した感じだった。

「お葬式、私じゃなくてがっかりした？」

「がっかりだなんて、そんなこと」

「なぜメールくれなかったの？ 心配じゃなかったの？」

「ごめん」とだけ言ってみたが、それに続く言葉が中々出てこなかった。まさか「受信拒否」にしたとは言えなかった。

「五人もの人が亡くなった。あの日」

シオリは声を震わせて言った。僕は黙って頷いた。

「もしかしたら、隣でシャワーを浴びていた人達かもしれない。いや、それは私達だった可能性もあったのよ。あのまま、あなたを起こさなかったら」

あの時、シオリに起こされていなかったら。それを考えることは恐怖だった。自ら起きられたという自信は正直ない。シオリは正に命の恩人だった。

「私がああ後、どんなに怖い思いをしたか、あなたは知らない」

直立したまま瞬きもせずに、シオリは僕の目を見て、そう言った。「どんな怖い思いをしたか、あなたは知らない」

もう一度、シオリは繰り返した。シオリの言葉が頭の中で何度も木霊した。

ホテルの窓から噴き出す炎。野次馬。そして怒号。終電で帰りたいばかりに、自分は命の恩人をあの密室に置き去りにしてきたのだ。シオリがどんな思いであのホテルから逃げ出したのかを考えることは僕の想像力を遥かに超えていた。

シオリは崩れるようにその場にすんとしゃがみ込み、両手で顔を覆った。それから鼻をすする音が聞こえた。傍を通る人々は皆一様にシオリを見、そして僕の顔を非難の眼差しで見比べた。僕はシオリの肩に手をかけたまま、何の言葉をかけてやることもできなかった。

別れ際のシオリの寂しげな瞳。まるで売女に金を放るように、ホテル代だけを残して部屋を立ち去る自分の姿。

その時、僕は一つの事実が付いた。帰り際、部屋のドアは空いていた、ということ。スーツを着、革靴を履いた僕は、部屋代の精算をすることなくドアを開けることができた。それは緊急事態によって、安全装置が働き自動的にオートロックが解除されていたのだ。その段階で、僕は本当に火災が発生していたことに気付くべきだったのだ。

たった一週間で、別人のようにやせ細ったシオリ。お互い「愛し

ている」とメール交換をしていた日々が、今となっては幻のようだった。否、僕はシオリを愛していたどころか、好きですらなかったのかもしれない。性欲を満たすため。妻以外の女の体を弄ぶため。ただそれだけの目的のために、シオリは存在していた。

僕の腕にもたれかかるようにして、ようやくシオリは腰を上げた。手の中のハンカチを目と鼻に強く押し付けた。泣き疲れた顔を僕に見せぬようシオリはしばらく俯いていたが、斎場に向かう車のヘッドライトを二度ほどやり過ぎてから、僕の右手を両手で包みこんで言った。

「浮気は命懸けということがよく分かった。大げさじゃなくて。全てを失ってもいい、と思わない限りしてはいけない。私は、浮気をするようなタイプじゃなかったの」

全てを失う覚悟。浮気相手のために、家族をなげうって死ねるのか。一体どれだけの人間が、その問いに「イエス」と即答できるだろう。

「私もあなたも、浮気なんてしてはいけない人なのよ。失うものが多いにも多過ぎるし、大き過ぎる。メル友はいつまでもメル友のままの方が良かったの」

シオリの手は震えていた。震える指で、僕のごつごつした指の関節を何度も撫でた。シオリの気持ちは少し落ち着いてきているようだった。僕に寄りかかることなくしっかりと自分の足で立ち、一つ一つの言葉もはっきりと僕の耳に届いた。幾分表情が強張っている感じはあったが。

「もう一度、言っておきたかった。ごめんなさい。もうこんなことはしないから。コウキさんと出会えたことは後悔していない。あなたのこの指は、好きだった。お元気でね。さようなら」

そう言って、シオリは振り返ることなく駅に向かって歩き出した。それまでの弱々しさはなく、背筋は伸び、足取りは力強く確かだった。

た。ヒールの音が濡れているように見える黒いアスファルトにはじけ、耳に残る間もなく闇に消えた。

僕は空白で満たされていた。自分の身体なのに自分の身体である実感が今一つなかった。この短時間の間に、一気に白髪が増えたような気がした。シオリの姿はもう視界にはなかった。シオリにはもう二度と会うことがないことは明らかだった。出会う必然のない二人が出会ってしまったのだから。

ふと、火事で亡くなった「水越」という名の女性について考えた。彼女が既婚者なのか、子供がいるのか、これまでどんな人生を送って来たのか、結局葬儀場まで来ておいて生前の彼女については僕は何も知らない。

でも、もしかしたら、彼女とはどこかで巡り合っていたかもしれない。メッセージを送ってくれた女性の中に、ひょっとしたら彼女がいたかもしれない。その可能性を否定することは誰にもできない。そう思うと不思議な感じがした。ネットでは全ての人と、どこかで繋がっているような気がした。生きている人とも、亡くなってしまった人とも。

国道に出るちょっと手前で僕は立ち止り、空を見上げた。明日の天気はいいはずなのに、一つも星を探し当てることができなかった。

＊

その夜、僕はうまく寝付けなかった。暑くもないのにやたらに喉が渴いていたが、中々起き上がる決心がつかずにいた。

隣の妻は規則的な寝息を立てながら布団を首までしっかり上げて眠っていた。結婚したての頃なら、平気で布団にもぐりこみ絡んでいたものだが、今は無謀な試みだった。隣で子供が眠っているとということもあるが、何しろ変な時間に起こされた時の妻の機嫌は最

悪だった。妻の眠りはここ数年でとても深くなり、鼾をかくようになっていた。

やっこの思いで布団から抜け出し、冷蔵庫で冷やすよりも冷たい水道水をコップ一杯飲んでから、再び妻の隣にもぐりこんだ。娘たちもいたって行儀よく、同じ方向を向いて熟睡していた。このいとおしい家族だけは絶対に失うまいと、僕は数年ぶりくらいに本気で心に誓った。

しばらくうとうとした感じはあったが、しつかり眠ったという感覚はなかった。時間を見ると、水を飲んで横になってから三時間程が経過していたが、妻も娘も相変わらず同じ姿勢のままだった。

どこかで、ぱちん、ぱちん、という音が聞こえた。最初、それは枕元の目覚まし時計が針を打つ音かと思ったが、デジタル式電波時計なのでありえなかった。

僕は体の向きを反対に変えた。瞼は目やにで重く、半分程度しか開かなかった。狭い庭に通じるリビングの曇りガラスが、真っ赤に光っていた。光は大きくなったり小さくなったり形を目まぐるしく変えながら、時に強くガラスに打ちつけていた。

中途半端な覚醒の中で、僕はその事態の大きさをおぼろげに把握した。この火勢では、妻と娘が楽しみに育てていたランコエとマーガレットは間違いなく駄目だった。

妻を呼び起こそうとするものの、喉が締め付けられてうまく声を上げることができず、火を見た途端、体も石のように硬直してもう一度寝返りを打つことができなくなっていた。僕はただ、燃え盛る炎のスケールと勢いを、目と耳だけで感じているしか為す術はなかった。

そうしている間に、誰かがインターホンと玄関の扉を何度も叩く音が聞こえた。こんな深夜に近所迷惑になるのは間違いないく

らしいの怒号に近い声で何かを叫んでいた。サイレンのような音も遠くから聞こえている気がした。しかしこれほどの騒動にもかかわらず、妻と娘は一向に目覚める気配はなさそうだった。

不思議に、僕は静謐だった。わずかに室温が上昇してきているのを頬で感じる事ができるくらい落ち着いていた。妻と娘が起きないのなら、もう一度このまま、何も気付かなかったふりをして、ぐっと眠りこんでしまいたい程だった。しかしそれはきっと神様が許してはくれないだろう。

激しく猛り狂う炎の向こう側で、小柄な女性の笑顔が見えた。僕はその女性のことをとても良く知っている気がした。

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1945u/>

浮気のススめ

2011年6月19日07時10分発行